

シリーズ3, 富山で育つ宿根草の組み合わせとデザイン⑮

職藝学院

教授 渡邊美保子

カラミンサ・ネペタ

カラミンサ・ネペタは、地中海原産のシソ科の宿根草です。初夏から、茎全体に白い小花が咲く姿は、さわやかな印象を与えてくれます(写真1)。また、宿根草花壇をデザインする際には、たいへん役に立ちます。その理由は、花の咲く期間が長いこと、どんな花と組み合わせても引き立つこと、葉にミントの香りのおまけがあること、そして、植えつけたあとは、何もしなくていいことです。もっとほかにもありますが、このぐらいにしておきます。



写真1: カラミンサ・ネペタ。草丈50cm程度。7月初旬

こんなに世話をやかせない宿根草は、他には見当たりません。逆に、こんなに何もしなくてもいいのだろうか?と心配になるくらいです。する事といえば、小さな小花の中に描かれている、人のような顔を見比べて、その表情を楽しむぐらいです(写真2)。白に近い薄紫の花びらには、濃い紫の斑点がついていて、それが、目や鼻や口のように見えるのです。笑っている顔、怒っている顔、とぼけている顔など、たくさんの表情があります。そうは見えないと思われる方は、見えるまで花を眺めてみてください。ただ、小さすぎるので、がんばらないでください。



写真2: カラミンサ・ネペタの花。8月初旬。

カラミンサ・ネペタの最大の特徴は、花の咲き方にあります。一つの花が咲くと、花の付け根から花茎が伸び、Y字に分かれて二本になり、その先に、それぞれ一つずつ花を付けます。一つずつ咲いた花の付け根から、再びY字に花茎が分かれて、また、その先に、それぞれ花を付けます。1が2になり、2が4に、4が8になり、8が16になるぐらいまで繰り返されます。この様子は、言葉で説明するよりも、ぜひ本物を育てて確かめることをおすすめします。3ミリ程度の小花ですが、それが倍、倍、に増えてゆきます。そんな、咲き方をしますので、開花期間がとても長いのです。一度に大きな花を咲かせるよりも、少しずつエネルギーを小出しにして、小花を咲かせてゆく生き方をします。6月末頃から、小さな白いつぼみをつけ始め、10月頃まで、のんびりと咲き続けます。花が終わっても、11月になると寒さで葉が赤紫色に変わってゆくので、花だけではなく紅葉も楽しむことができます。

カラミンサ・ネペタは、日当たりを好み、水はけの良い土であれば、よく育ちます。乾燥にも寒さにも強く、害虫もほとんど寄り付きません。草丈は50cm程度です。冬には、茎が枯れてゆきます。春になり雪が解けたら枯れた茎を根元から刈り込みます。4月中旬には地面からたくさんの新芽が数十本も伸びてきて、こんもりと茂ってきます。

組み合わせのコツは、カラミンサ・ネペタを手前にして、後ろに背の高い宿根草などを配置します(写真3)。白い小さな花が、茎全体にびっしりとついた咲き方をしますので、隣に植えた花を引き立たせてくれます。また、花壇に一株あるだけでも、十分存在感があります。夏にはすっきりとしたミントの香りと涼しげな白い花を楽しむことができます。利用法としては、花が咲く直前の茎を根元から刈り込み、つるして乾燥させますと、ミントの香りの芳香剤にもなります。



写真3: 手前はカラミンサ・ネペタ、後ろは、ガウラ(桃色)、斑入りイトススキ、など。10月初旬。